〔論　文〕

エレミヤ書に見る教会と国家

――預言者エレミヤと国家――

油井義昭

序……27
Ⅰ　エレミヤと国家―ヨシヤ王の死（六〇八年）まで―国家に警告するエレミヤ……28
Ⅱ　エレミヤと国家―エホヤキム王の時代（六〇八～五九七年）の中で―国家と衝突するエレミヤ……42
Ⅲ　エレミヤと国家―ゼデキヤ王の時代（五九七～五八六年）の中で―国家に直言するエレミヤ……48
結語……58

序

教会と国家の問題については、聖書中でも旧約聖書殊に預言者の書から教えられることが多いと思う。以下イスラエルの預言者エレミヤが国家の滅亡と民のバビロン捕囚、そして国家の将来についていかなる見解を持ち、どのような幻と啓示を受け、また堕落した国家指導者と国民、そして背信の国民と対峙したのかに

ついて考えてみたい。エレミヤが生きていた時代に、エレミヤがいかなる国家観を持っていたかを探ることにしたい。又、国家に対する、又、世界平和に対する宗教者の責任を問い直すに当たって、エレミヤの国家観を尋ねることは、決して無益ではないであろう。

Ⅰ　エレミヤと国家―ヨシヤ王の死（六〇八年）まで―国家に警告するエレミヤ

1　エレミヤの召命（六二六年）と世界情勢

エレミヤは預言者として国家に対する主なる神の意志を伝えた主なる神の道具となった人物である。トーレイフ・ボーマンが『ヘブライ人とギリシャ人の思惟』の中で言うように、ギリシャ的世界観の特色の根本が「象徴主義」にあり、ヘブル的世界観のそれが「道具主義」にあるとするならば、器としての預言者の特異性は自ら、主なる神の道具として神の意志を民と世界に向かって忠実に伝え、これを明らかにしたところにある。

イスラエル預言者と政治とは不可分の関係にある。預言者は常に国家あるいは社会に対して重大な関心を抱いた。神の人であった預言者は、又、時の人であった。預言者が「先見者」あるいは「見る者」（ローエー）であったということは時の中にあって、言葉を見た人であった。

「国」（マルクース）は国の領土とか制度を指すよりもむしろ支配そのもの、統治そのものを言う。そもそも「イスラエル」という名称は「神の支配」を意味している。しかし、神の支配といっても旧約の場合には、今日我々が考えるように最初から終末的な神の支配とか神の霊的な王国を言うのではなく、先ず神の地上的現実的支配を意味するのである。従ってそれは実際の政治に関係する。イスラエルの民はそもそも神政政治（theocracy）の国である。それでイスラエルにおいては、王は神の支配を代理する者に過ぎず、統治の主権

は神にある。イスラエルの歴史においては、王の神格化―神王という外来思想への誘惑はあった。しかしそれが完全に実現しなかったのも、神支配の観念が歴史的に根深くあったためである。イスラエルは元来、宗教的民族であった。政治的民族ではなかったからである。このような神政政治の立場をどこまでも守るために戦ったのが旧約の預言者達である。預言者は神の審きと救いの立場から歴史を見、政治の問題に関わったのである。①

エレミヤは紀元前七世紀から六世紀にかけてユダ王国の末期に預言者としての召命を受けて第一回バビロン捕囚（五九七年）とユダ王国の滅亡（五八六年）を目撃した預言者である。エレミヤに預言者召命が下ったのは、前六二六年のことであった。彼はヨシヤ（六四〇～六〇九年）エホヤキム（六〇九～五九七年）、エホヤキン（五九七年）、ゼデキヤ（五九七～五八六年）の治世、即ちユダ王国の最後の王たちの治世に活動し、前五八六年にエルサレムが陥落した後も、しばらく生き長らえた預言者であった。②

(1) 第一の幻　主がエレミヤの口にその手を触れた幻―国々への預言者（1章4～10節）

「主の言葉が私にあった。『わたしは、あなたを胎内に形造る前からあなたを知り、あなたが腹から出る前からあなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた』」（1章4～5節）。

「その時、主は御手を伸ばして、私の口に触れ、主は私に仰せられた。『今、わたしのことばをあなたの口に授けた。見よ。わたしは、きょう、あなたを諸国の民と王国の上に任命し、あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、また植えさせる』」（1章9～10節）。

今日あなたを預言者に任じ、あなたの言葉に神の言葉の権威を賦与する。あなたの言葉に従うか否かによって、万国の盛衰興亡は定まるであろうと。アナトテの祭司の子青年エレミヤは、このように神の言葉を唯一の武器として、万国に対抗して立たされた。時はヨシヤ王の一三年（前六二六年）、エレミヤの年齢は二十

歳か二十二、三歳か、その辺であろうと推測される。[3]「万国（国々）の預言者」とは諸国民に関わる審きを予告する預言者という意味である。主はエレミヤにとり、ユダ王国の神であるだけでなく、全世界の神である（アモス3章7節）。それゆえにエレミヤは神の最も忠実な僕であり、御旨を何人にもまさって明らかに知る預言者である。エレミヤの預言者としての言葉もまた全世界に関するものである。主はエレミヤに「国々への預言者」という名を与え、彼をしてその使命の世界的であることを自覚させた。[4]「国々への預言者」ということは、預言者エレミヤのユダ王国への姿勢は、神の言葉を神の視点から語るということであり、ユダ王国をはじめ当時の世界帝国と国々を相対化する立場に立って語るということである。この点がユダ王国の国家指導者や同胞と異なる立場と視点を預言者エレミヤは持ったということである。

(2) 第二の幻　アーモンドの枝の幻（1章11～12節）

「主の言葉がわたしにあった。『エレミヤ。あなたは何を見ているのか』。そこで私は言った『アーモンド（シャーケード）の枝を見ています』。主は私に仰せられた。『よく見たものだ。わたしのことばを実現しようと、わたしは見張っている（ショーケード）』（1章12節）。

アーモンドの花は、エレミヤにとって霊感であった。神は眠っておられるのではない。ご覧にならないのではない。ただ時を待っておられるのである。神の審きが行なわれるのは、そう遠いことではない。[5]

(3) 第三の幻　煮え立っている釜（1章13～16節）

第三の幻は「煮え立っている釜」で「北のほうからこちらに傾いている。わざわいが、北からこの地の全住民の上に降りかかる」（1章13節）

「北からのわざわい」（1章14節）とは何を意味するのか。前六二六年アッシリヤ帝国は没落の過程にあり、バビロニヤとメディヤはアッシリヤを倒すべく多事であり、メソポタミヤ諸国は南に向かって来る余裕はな

かった。「北」は不確定な起源を持つ暗黒の勢力の象徴であった。前六二六年の「北」の勢力は間違いなくバビロニヤである。「北とすべての王国の民」とはバビロンとその同盟軍である。[6] エレミヤは、いかなる民族が北敵としてユダを襲って来るかは的確な知識はないが、北方の空にみなぎる戦雲についての憂いが主から与えられた。エレミヤが「国々の預言者」とされたということは、彼が国際政治家ではなく、世界を神認識にまで導く教育者であったということである。あたかもアモスがイスラエルは審きの結果として神の手により騙すこの彼方に捕らわれ行くことを預言しつつも、その行き先がどの国であるか明示しなかったように（アモス5章27節）、エレミヤも北敵がどの民族なのか明言していない。両預言者にとって、主の審きをもたらす使者が何者であるかは神秘な認識であり、預言者が的確に知るところではなかった。[7]

(4) 内なる両極性（1章10、17～19節）

エレミヤは1章10節で最初懲罰を加え、滅亡と破壊を預言しなければならなかった。そうして初めて彼は慰めと希望を与え、「建て」「植える」ことが出来た。遭遇しなければならない数々の激しい試練を切り抜けるのに必要な強さを与えようとして、神は彼に言われた。「あなたは腰に帯を締め、立ち上がってわたしがあなたに命じることをみな語れ。彼らの顔におびえるな。さもないと、わたしはあなたを彼らの面前で打ち砕く」（1章17節）。ひるむ心に打ち勝ち、敢為の精神で耐え抜くことが出来るように、突如彼は通常の彼とは全く反対の人柄に変容させられた。「見よ。わたしは、今日、あなたを、全国に、ユダの王たち、首長たち、祭司たち、この国の人々に対して城壁のある町、鉄の柱、青銅の城壁とした」（1章18節）。実際彼は同時代の人々を憤激させ、苛立たせ、不安にさせるのに成功した。民の安心感を打ち砕き、彼らが崇めている人々を叱責することによって憂うつに侮辱を増し加えた。確かに、外から来る一切の攻撃に対しては堅固な要塞のように持ちこたえる力を与えられたが、エレミヤの内的生は、青銅や鉄に他ならなかった。[8]

(5) エレミヤの召命の年（前六二六年）が歴史に持つ意味

エレミヤが預言者への召命を受けた年は、歴史上の転換点だった。六三三年、アシュルバニパルは死に、アッシリヤ帝国は衰退して崩壊寸前の状態で残された。彼の治世の間にニネベは帝国を掌握する力を失い、エジプト、ユダ、及びパレスチナ、シリヤ内の他の諸国は、それぞれ独立を取り戻した。近隣諸国に対するアシュルバニパルの蛮行と懲罰的侵入とは、アッシリヤに対する憎悪を激情にまで増幅させていた。長年の間、アッシリヤは、勢力下の諸国民に略奪を働いてきた。アッシリヤの名前が知られているところでは何処でも、その名は忌み嫌われた。帝国の終末が刻々と近づきつつあった。「私だけは特別だ」と、かつて得意気にうそぶいていた都市ニネベは荒廃した土地に、砂漠のような渇いた荒地になろうとしていた。「そこを通り過ぎる者はみな、嘲って、手を振ろう」（ゼパニヤ書2章15節）。

「ああ。流血の町。虚偽に満ち、略奪を事とし、強奪をやめない。…わたしはあなたの裾を顔の上にまでまくり上げ、あなたの裸を諸国の民に見せ、あなたの恥を諸王国に見せる」（ナホム書3章1節、5節）。

バビロンの支配者だったアシュルバニパルの死は、長い間アッシリヤに従属させられていたため、かつて所有していた権力と特権を奪回して、往昔の栄光をこの都市に取り戻そうと渇望するバビロニヤ人にとって、新しい反乱を起こす好機であった。ほどなくナボポラッサルがバビロン王となった（前六二六～六〇五年）。六二六年は新バビロニヤ王国の開始の年であり、この歴史の転換点にエレミヤは「国々への預言者」として召されたのである。支配者がアシュルバニパルからナボポラッサルに変わると、アッシリヤの覇権は終焉を迎え、アジアのセム系諸国民の指導権はカルデヤ人、つまりバビロニヤ人に移った。バビロニヤをがっちり掌握すると、ナボポラッサルは、メディヤの諸族と彼らの王キュアクサレス（治世約六二五～五八五年）と同盟して、アッシリヤに決定的な攻勢をかけた。六一二年、ニネベは猛攻を受けて陥落し、アッシリヤ帝国

は歴史から姿を消し、アッシリヤ国民はいなくなった。[9]

2　ユダ国民の宗教的・道徳的堕落と罪を糾弾するエレミヤ

エレミヤは今や真の預言者として全世界の諸国民の歴史を支配される神の直接の啓示に基づいて、ユダ王国の宗教及び道徳状態を観察し、国の滅亡の必然を確信するに至った。エレミヤはユダの民の罪の様相を主なる神の否定と偶像崇拝として糾弾し、宗教的堕落から道徳的堕落が生ずると指弾した。

(1)　主なる神の否定、神への背反

主なる神の否定、神への背反は幾つかの表現によって示されている。

①「神を捨てる」

「彼らはわたしを捨てて、他の神々に生け贄をささげ、手で造った物を拝んだ」（1章16節）。

「あなたの神、主が、あなたを道に進ませた時、あなたは主を捨てたので、このことがあなたに起こるのではないか。あなたが、あなたの神、主を捨てた」（2章17、19節）。

「あなたの子らはわたしを捨て、神でないものによって誓っていた」（5章7節）。

②「神に背く」

「牧者たちもわたしに背き」（2章8節）。

「あなたがたはみな、わたしに背いている」（2章29節）。

「あなたは自分の神、主に背いている」（3章13節）。

「彼らは、背いて去って行った」（5章23節）。

③「神の教え、律法を破る」

「彼らはわたしが与えたわたしの律法を捨て」（9章13節）。

「彼らが彼らの神、主の契約を捨て」（22章9節）

④「契約を破る」

「わたしの前で結んだ契約の言葉を守らず、わたしの契約を破った者たちを、二つに断ち切られた子牛の間を通った者のようにする」（34章18節）。

⑤「わたしを忘れる」「わたしを知らない」「わたしを恐れない」

「わたしの民がわたしを忘れた日数は数え切れない」（2章32節）。

「実に、わたしの民は愚か者で、わたしを知らない」（4章22節）

「あなたがたはわたしを恐れないのか。わたしの前でおののかないのか」（5章22節）。

⑥「聞き従わない」頑固に自己自身に閉じこもり、神に心を開こうとしない姿である。

「彼らは聞かず、耳を傾けず」（7章24節）。

「彼らはわたしに聞かず、耳を傾けず」（7章26節）。

「この民は、自分の神、主の声に聞かず」（7章28節）

⑦「顔を向けない」

「彼らはわたしに背を向けて、顔を向けなかった」（2章27節）。

エレミヤ書における国民の罪、宗教的堕落、不信仰者の姿は、「神を捨て、神の教えを捨て、神の契約を破って実行せず神でない偶像を作ってこれに仕え、さらに自分の罪を認めず、神に背き、神に顔を向けず、神の言葉に耳を傾けず、神を忘れ、神を知らず、畏れない人」として述べることが出来る[10]。

(2) 人工的な水溜めを掘ること－偶像

「わたしの民は二つの悪を行なった。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水溜めを、水を溜めることのできない、壊れた水溜めを、自分のために掘ったのだ」（2章13節）。

人間が神を捨てて自分自身を神と見なし始める時、人間は神の高い位置に立とうとする。そして自分を支えるものを自身の手で作ろうとする。人間が作ろうとしたものが偶像であり「水を溜められない水溜め」である。人間は自分の生命維持のために水を欲するが、それを得るために、生ける生命の源である神の代替物となると考えた人工的な水溜めの穴を掘るのである。これこそ偶像である。

8章19節では「なぜ、彼らは自分たちの刻んだ像により外国のむなしいものによって、わたしの怒りを引き起こしたのか」とある。神は偶像崇拝をする民を怒るのであり、それは神によって神の民とされていた者が神を捨てて自分で作った偶像に乗り換えたからである。「自分たちの刻んだ像」（プシリーム）は彫刻された像である。次の「外国のむなしいもの」（ハブレー・ネーヒャール）は空しいものを意味し、何も無いもの、無意味なものを指している。偶像の本質が空虚であることを示している。

32章34節には「忌むべき物」（シークーツ）がある。これは嫌悪、嫌忌、あるいは、その対象を意味する。ここで偶像を憎み、忌み嫌う主体は神である。神の民とされた者も、神に従って偶像を憎み、忌まねばならないはずである。偶像は2章37節で「あなたの拠り頼む者」と表現されている。エレミヤ書全体は、ユダの民が自分で造って自分で頼りにしている無意味な偶像の内容を事細かに説明している。[11]

①自然物の偶像

エレミヤはユダの民が木や石を神としていると述べる。2章27節では次のように言う。「彼らは木に向かっては『あなたは私の父』、石に向かっては『あなたは私を生んだ』と言っている」。又、8章2節では「彼ら

が愛し、仕え、従い、伺いを立て、拝んだ日や月や天の万象」と述べられ、自然現象としての太陽神、月神、その他の星辰崇拝を指摘している。

こうした自然神に対して、次第に人間は自分の手で造った偶像を神として崇拝するようになる。エレミヤ書は偶像が人工物、人造物であるという本質を指摘する。例えば、1章16節、25章7節では「手で造った物」、32章30節では「手のわざ」、10章3節では「森から切り出された木」「木工が、なたで造った物」と言う。10章4節では「銀と金で飾られ、釘や槌で動かないように打ち付けられる」としている。16章20節にはこうした偶像にうつつを抜かしている人々、政府高官、国王、祭司、預言者たちに対して、エレミヤが「人間は、自分のために神々を造れようか。そんなものは神ではない」と嘲笑している。

②天の女王

7章18節に「天の女王」（メレヒェット・ハッシャーマイム）という偶像に対する礼拝が記述されている。これは、アシュタロテ、イシュタル、アシェラ、アテナ、アナヒターと同じものと考えられる。7章18節には、天の女王に対する家族ぐるみの礼拝の様子が記される。「子どもたちはたきぎを集め、父たちは火をたき、女たちは麦粉をこねて『天の女王』のための供えのパン菓子を作る」。「アシェラ像」は17章2節に出て来るが、アシュタロテあるいはアシェラトとも言われ、西セム人の豊饒女神の像を指している。この女神には二つの角が生えており、愛と豊饒の女神であるが、他方で戦争の女神を表している。[12]

③モレク礼拝

人身犠牲が異教の神々に捧げられていた。エルサレムのベン・ヒンノムの谷では、契約関係の精神や意図とは異なった異教的な祭儀に溺れることによって汚されていた。7章31節「自分の息子、娘を火で焼くために、ベン・ヒンノムの谷にトフェテに高き所を築いた」。19章4節「この所を罪のない者の血で満たし、バア

ルのために自分の子どもたちを全焼のいえにえとして火で焼くため、バアルの高き所を築いた」。谷の中で人々は自分たちの息子を殺し焼いた。それはモレク礼拝の儀式に従ったもので、危急の時に特別な効果があるとして求められた犠牲であった[13]。

ユダの民の神にとって、こうした偶像への信仰は、主なる神を捨てて他の神々に帰依するという、モーセの十戒の中の第一戒、第二戒、を犯す罪である。主なる神にとって、最も嫌悪すべく忌むべきユダの民の行動であった。エレミヤはこのような偶像礼拝と不正な社会とは同じ根から生じ、互いに密接な関係にあると述べる。偶像礼拝とは、像を神として礼拝することではなく、人間の想いを神とすることである。それは、神の力を秘かに手に入れる手段である。偶像礼拝は、ただ礼拝方法の誤りだけではなく、むしろ生き方の狂いを意味する。一方では主なる神への熱心な礼拝が偶像への礼拝へと変わり、もう一方では社会を満たす欺瞞が見えなくなり、むしろそれを利用して利益を手に入れようとする。偶像礼拝と社会的な不正は同じ根から出た悪なのであって、決して切り離せない悪である。それゆえ、預言者の批判は正義を欠いた不正な社会に向けられると同時に、偶像礼拝にも向けられたのである[14]。

3　祖国への愛と神への共感との間で苦しむ預言者

エレミヤは前六二六年頃から預言者として働きを始めたが、彼の預言活動は、幻が教えた通りに、審きの接近を警告する言葉で始まる。国が滅びる時は、何らかの病巣を抱えている時であり、その病巣を指摘するために、集中的に預言者が送られて来る。しかし、病巣にいち早く気付き、それに対応する治癒力を持った国であれば、滅びずに存続するが、国が滅びる時は、病巣に無自覚であったり、それに対処する治癒力を欠いている時である。病巣がひどくなればなる程、強力な薬を大量に投与せざるを得ない。しかし、病巣は薬

を排撃しようとする。預言者もそのように排撃された。聖書に名を残す預言者は多かれ少なかれ、民に苦しめられた人である。エレミヤは4章19～21節で次のような警告を発する。

「私のはらわた。私のはらわた。私は痛み苦しむ。私の心臓の壁よ。私の心は高鳴り、私はもう、黙っていられない。私のたましいよ。おまえが角笛の音と、戦いの雄たけびを聞くからだ。破滅に次ぐ破滅が知らされる。全国が荒らされるからだ。たちまち、私の天幕も荒らされ、私の幕屋も倒される。いつまで私は、旗を見、角笛の音を聞かなければならないのだ」。

エレミヤの魂が聞いている「角笛」は、南ユダ王国に襲いかかる北からの軍隊の進軍の合図であり、「旗」は北の軍隊の軍旗である。またこの軍隊によって一瞬のうちに荒らされる。

「幕屋」とは南ユダ王国のことである。しかも「私の」幕屋と述べているので、エレミヤは自分を南ユダ王国と一体のものと考えている。ユダ王国は彼が愛する祖国である。それで「私の」幕屋と呼ぶ。その祖国が「破滅に次ぐ破滅」を受けるのであるから、身を切られる程の痛みを覚える。祖国に審きを告げることは彼の本意ではない。祖国を愛する平凡なユダヤ人としての自分を押し殺し、神の言葉を託された預言者として行動せざるを得ないので、激しい苦痛が伴い、はらわたは悶え、心臓は呻くことになる。民には見えない破滅が彼には見えている。それが彼の呻きを一層つのらせる。

エレミヤは4章23～26節で国が神の審きを受けた様を次のように描写する。

「私が地を見ると、見よ、茫漠として何もなく、天を見ると、その光はなかった。

私が山々を見ると、見よ、揺れ動き、すべての丘は震えていた。

私が見ると、見よ、人はひとりもいなく、空の鳥もみな飛び去っていた。

私が見ると、果樹園は荒野となり、町々は主の御前で、その燃える怒りによって、取りこわされていた」。

ユダの民は神の言葉を聞こうともしない。そこで神が造り出した調和は崩され、飢饉を招くことになる。神の審きは調和を守るための戒めである。

エレミヤは5章26～29節で悪事を謀る民に対して神の審きを宣告する。

「わたしの民のうちに、悪者たちがいるからだ。彼らは、待ち伏せして鳥を取る者のように、罠をしかけて人々を捕らえる。鳥で一杯の鳥かごのように、彼らの家は欺きでいっぱいだ。だから、彼らは偉い者となって富む。彼らは、肥えて、つややかになり、悪事に進み、さばきについては、みなしごのためにさばいて幸いを見させず、貧しい者たちの権利を弁護しない。これに対して、わたしが罰しないだろうか。―主の御告げ―このような国に、わたしが復讐しないだろうか」。

神の言葉に従わずに、悪事を謀る民に対して「これに対して、わたしが罰しないだろうか」と述べる。審きは神にとっても辛いことである。このように自分に言い聞かせて、その正しさを確認しなければ、審きを下すことは出来ない。エレミヤは祖国を愛するユダヤ人の一人として平凡に生きたいと願う一方で、神に共感し預言者として働かねばならないという自覚も持っている。この願いと自覚とが一致していれば苦しみは起こらないが、分裂しているなら苦悩せざるを得ない。エレミヤは生涯この分裂を背負った預言者であった[15]。

4　申命記発見とヨシヤ王の宗教改革（国家的宗教）

(1)　宗教改革

ヨシヤ王（前六四〇～六〇八年）は父王アモン（前六四二～六四〇年）が暗殺された後、王位に就いたが、マナセの政策と全面的に絶縁した。アッシリヤの権力と影響力が急速に衰退したためマナセの偶像崇拝を忌

み嫌っていた人々にとって暮らしやすくなった。

ヨシヤ王の一八年(前六二一年)、神殿修理の際、大祭司ヒルキヤが神の宮において「律法の書」を発見した。そして神殿修理使シャファンがこれを携えて王の前に出てこれを読んだ。王は律法の書の言葉を聞いた時、自分の衣を裂いた(Ⅱ列王記22章3〜11節)。何故か。それはそこに記されている言葉とユダ王国の現状とが、宗教的に道徳的に、又、社会的に、余りにも懸隔があり、ユダは神の契約に背反していることの甚だしいことに驚いたからである。又この書に記されてある、この背反に対しては必ず大いなる災いが国に臨むとの預言に恐れたからであった。ここにおいて王はこの「律法の書」に基づいて国中の大改革を行なった。

先ず第一に主の神殿を清め、男娼の家を壊し、過越しの祭りを行なった。又、国内にある諸々の異教礼拝とその偶像の祭壇を破壊し、口寄せ、卜占者を取り除いた。第二に、地方の宗教礼拝の革新が行なわれた。今まで道徳的に汚れを極めた地方の「高き所」の祭壇はことごとく壊され、首都エルサレムの神殿以外の礼拝は厳禁された。これに伴い、今まで地方の祭壇で奉仕した祭司は皆エルサレムに招集され、神殿奉仕の祭司と同様に国費をもってその生活は支持されることになった[16]。

(2) 改革の精神—大イスラエル主義

申命記によってエルサレムの神殿における礼拝集中を骨子とするヨシヤ王の大改革の主眼は、一方においてユダ国内の改革であると同時に、他方においては、北王国イスラエルの残存の民をエルサレムの神殿に引き付け、両国分裂前すなわちダビデ王の統一連合王国の盛時に帰らせようとする企てであった。それゆえこの改革は国家主義の実行であると同時に、滅亡した北王国イスラエルの国土をユダに併合する、大イスラエル主義即ち宗教的国民主義の実行であった[17]。

(3) 改革の失敗

エレミヤもヨシヤ王の宗教改革に暫くは力を添えた。エレミヤが預言者として神の召しを受けた時は、ヨシヤ王が宗教改革の運動を始めた頃であった。その運動にエレミヤがどのように関わったかは、現存の資料では明らかではない。同じ路線上の働きであった以上、何らかの関わりがあったと考えるのは自然である。改革者の元老シャファン一家はエレミヤの終生の最も親しい友であり、女預言者フルダはエレミヤの叔母であったからである。フルダの夫のシャルムは装束係りであり（Ⅱ列王22章14節）、シャルムはエレミヤの叔父でもあった（エレミヤ書32章8節）。エレミヤは初期の頃は深く関わったとしても、その改革運動が次第に皮相的なものになって行くのを目撃し、独自の活動を展開していくようになったのかもしれない[18]。

エレミヤは11章2～3節、5節で次のように言う。「この契約のことばを聞け。これをユダの人とエルサレムの住民に語って、彼らに言え。『主は、こう仰せられる。この契約のことば（申命記）を聞かない者は、呪われよ。』そこで私は答えて言った『主よ。アーメン』」。

しかるに、改革は国民の心から湧き上がった改革運動ではなく、王の命によって始められた国家の政治的な運動であったので、全ての官僚的国民精神運動と同様、その改革は制度儀式等外形的な表面の事に終り、国民の心の高ぶりを砕き、心そのものを神に向け帰らせる力はなかった。

エレミヤ書8章5～6節、8節でエレミヤは次のように言う。「なぜ、この民エルサレムは、背信者となり、背信を続けているのか。…彼らは『私は何ということをしたのか』と言って、自分の悪行を悔いる者は、ひとりもいない。どうして、あなたがたは『私たちは知恵のある者だ。私たちには主の律法がある』と言えようか」。心の悔い改めのないところに、国の救いはない。エレミヤがこの運動に失望したことは当然であった[19]。

(4) ヨシヤ王のメギドでの戦死（前六〇八年）

申命記改革の後十三年経った。六〇六年にアッシリヤの首都ニネベが陥落した。アッシリヤ王国を相続したのは、新しいカルデヤ王国（バビロン王国）であった。暫くの間シリヤとパレスチナとは、エジプトの手に落ちるか、それともバビロニヤに併合されるか分からなかった。エジプト王ネコは前六〇八年にその領土を奪い、これを自己の領有とした。しかし六〇五年にネコはカルケミシュの戦いで、ネブカデネザルのために大敗した。これはシリヤとパレスチナを、新バビロニヤ王国に与えた。シリヤとパレスチナはその配下にあって前五三八年におけるバビロン捕囚にまで及んだ。大イスラエル主義を唱えたヨシヤ王は、六〇八年、メギドの戦場で、ネコの北上を阻止しようとして悲劇的な死を遂げたために、すべてが水泡に帰した。彼はどうにかしてネコの東方進撃を阻止しようと企てたが、その結果却って自国をエジプトに貢を納めるようにした。こうして宗教改革もヨシヤ王の死と共に頓挫したのである。[20]

Ⅱ　エレミヤと国家―エホヤキム王の時代の中で（六〇八～五九七年）―国家と衝突するエレミヤ

前六〇八年にヨシヤ王がメギドで戦死し、その子エホアハズが王となったが、エジプトの政治的干渉により在位三ヵ月で廃され、その兄エホヤキムが王位につけられた。父ヨシヤは神を敬う名君であったが、エホヤキムはこれに反して偶像崇拝を復興し、かつ人民を虐げる悪王であった。このような人物が王位について、ユダ王国の危険は増した。エレミヤはエホヤキムが王として治めている間（六〇八～五九七年）に二回政府と衝突した。

(1) 第一の衝突―エレミヤの神殿偶像崇拝を断罪する神殿説教

エレミヤ書7章は神殿説教である。エレミヤはエホヤキム王が位についた年、神殿の庭に立って、全国か

ら集まった参詣の群衆に向かって叫び、7章2～7節で次のように語った。「主を礼拝するために、この門に入るすべてのユダの人々よ。主のことばを聞け。イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。あなたがたの行いと、わざとを改めよ。そうすれば、わたしは、あなたがたをこの所に住ませよう。あなたがたは、『これは主の宮、主の宮、主の宮だ』と言っている偽りのことばを信頼してはならない。もし、本当に、あなたがたが行いとわざとを改め、あなたがたの間で公義を行い、他の神々に従って自分の身に災いを招くようなことをしなければ、わたしは、この地に、とこしえからとこしえまで、あなたがたを住ませよう」。

神殿中心、シオン（エルサレム）不可侵の信念の源は前七〇一年のエルサレムを包囲したアッシリヤのセナケリブ王を撃退した出来事にある。前七〇一年エルサレムはアッシリヤの包囲攻撃の前に風前の灯であった。しかし奇跡的な事件のためエルサレムは救われた。ここに「神の都」エルサレムの難攻不落の信仰、無敵神殿の信仰を、同時に、神殿そのものへの呪術的な信仰を生み出すに至った[21]。

アッシリヤのセナケリブ王撃退以来、民衆の間に、エルサレム不可侵・神殿神聖、との信仰が高まった。そして同時にその信仰は浅薄となった。ただ目に見える壮麗な神殿が、首都エルサレムとユダ王国とを永久に守護するものとの迷信となった。ヨシヤ王の申命記改革によって国中の礼拝をこの神殿に集中して以来、その迷信は益々促進された[22]。

ユダの民は公義（ミシュパート）と公正（ツェダーカー）を含んだ律法を守らずに、神殿に詣でて、「これは主の宮、主の宮、主の宮」と三回呪文を唱えれば、何をしてもよいと思い込んでいる。彼らは単なる人間の建造物の神殿に拠り頼み、三回呪文のような「偽りのことば」を信頼しているだけである。これが神殿偶像崇拝である。ユダの民は「盗み、殺し、姦通し、偽って誓い、バアルのためにいけにえを焼き、ほかの神々に従う」（7章9節）という罪を犯した。彼らは、一戒、二戒、六戒、七戒、八戒、九戒の罪を犯した。

ユダの民は神の律法をことごとく破り捨てていたにも拘わらず、彼らは特定の時に、神殿に詣でて外面的形式的な神礼拝をしていたわけであり、こうした彼らの行動がエレミヤによって神殿偶像礼拝であるという鋭い批判を受けた。

しかも、彼らは律法を破って神を捨てながら、7章10節によると「わたしの名がつけられているこの家のわたしの前にやって来て立ち、『私たちは救われている』」と言っていると批判される。神と民との生命を賭した契約を破っているにも拘わらず、「わたしの名がつけられているこの家に来て」神殿を別の偶像に仕立て、この神殿偶像を拝み「救われている」（ニーザルヌー）」と言っている。神殿は既にユダの民が自分の手で造った神殿を偶像に化していた[23]。

我々はここにエレミヤの国家観の暗示を与えられる。これをイザヤについて見ると、イザヤはエルサレムの神殿を重んじ、イスラエルの政治形態として王国を重んじた。勿論王国の基礎はインマヌエルの信仰にあり（シオンに据えた礎石・イザヤ書28章16節）、国家と宗教とは不可分離である必然関係に立っていた。しかるにエレミヤにとってはイスラエル王国の中心としてのエルサレム神殿は却って神と民との真の交わりを妨げる妨害物であるかのように感じられた。エレミヤにとって一切の形式なき信仰、組織によらない宗教生活こそ純粋であることを思わざるを得なかった。それでエレミヤは宗教の形式に対しても国家に対しても他の預言者より一層ラディカルな見解を持つに至った[24]。

エレミヤは26章6節で民の神殿偶像崇拝の結果、主の神殿は崩壊すると宣告する。「主はこの宮をシロのようにし、この町を地の万国ののろいとする」。主の神殿が崩されるとエレミヤは述べた。これを聞いた祭司と預言者とすべての民は怒ってエレミヤを捕らえ、この神殿とこの町が荒地となるなどとは怪しからぬ暴言であるとなじり、生かしてはおかないと喚き、エレミヤを「死刑に当たる者」として、官に告発した（26章6

～11節)。エレミヤは答弁して言った。「主がすべてのことばをこの宮とこの町に預言するよう、私を遣わされたのです。今、あなたがたの行いとわざを改め、主の御声に聞き従いなさい。そうすれば、主も思い直される。私はあなたがたの手の中にあります。良いと思うよう、正しいと思うようにしなさい。私を殺すなら、罪のない者の血の報いを、自分たちと、この町と、その住民に及ぼすことを知れ。主が、私を遣わして、あなたがたの耳に、これらのことばを語らせたのだから」(26章12～15節)。実に毅然とした態度であった。政治家たちは評議したが、道理の分かった者がその中にいた。即ちシャファンの子アヒカムがエレミヤを助けて、その生命を救った[25]。教会(祭司達そして偽預言者たち)が国家の奴隷であり、宗教が国家の権力と固く結合させられている限り、真の平和は来ないと言える[26]。

(2) 第二の衝突―ベン・ヒンノムの谷のトフェテでメッセージを告げた時の政府との衝突

政府との第二の衝突は、エレミヤがベン・ヒンノムの谷のトフェテで初めてメッセージ(使信)を告げた時と、その後エルサレムの神殿の境内で告げた時であった。神殿の最高監督者パシュフルは公衆の面前でエレミヤを打ち、投獄した(18章1節以下、19章14節－20章3節)。

①陶器師の粘土(18章)

ある日エレミヤは陶器師の店頭に立った。陶器師は粘土をろくろにかけて、一つの器を製作していたが、作り損じたので、その土で別の器を作った。これを眺めた時、エレミヤに一つの霊感が臨んだ。陶器師がその手の中の粘土を自由に取り扱うように、国民の運命も神の手にある。もし国民が罪を悔いて悪を離れるなら、神は災いを下すと宣言したことを中止して福祉を与える。国民が悪を行なうなら、神は災いを下す。国民の運命は機械的必然に定められているのではなく、正義の法則によって定められる。これを示されたエレミヤは、国民に、悪しき道と行ないを棄てよと説いた。しかし、国に満ちる偽預言者、指導者、官僚は彼の

言葉に耳を傾けず、却って、陰謀を設けて、エレミヤを陥れ、彼を殺そうと謀った（18章1～23節）[27]。

②エレミヤはトフェテで焼き物のびんを砕き使信を伝え、エルサレムの神殿で使信を語り逮捕される（19章－20章）

エホヤキム王の四年（前六〇五年）のある日、エレミヤは陶器師の家で土の焼き物のびんを買い、民の長老と祭司の長老数人を伴ってベン・ヒンノムの谷に行った。これはエルサレムの南の谷で、そこにモレクを祀る祭壇があった。エレミヤは手に持ったびんを地に投げ、びんは粉々に砕け、人々はあっと驚いた。エレミヤは厳粛に告げて言った。「この民は偶像を礼拝し、罪のない者の血を流すので、神はこの民とこの町とをこのびんのように砕く」（19章4～5節、10～12節）。

それから神殿の庭に立って、同様の言葉を語った。これを聞いた神殿の監督者イメルの子パシュフルは、エレミヤを捕らえて、ベニヤミン門の足かせに繋いだ。翌日釈放される時、エレミヤはパシュフルに言った。「主はあなたの名をパシュフルではなくて、『恐れが回りにある』と呼ばれる。あなた自身がすべての者への恐れとなる。それはバビロン王が攻めに来て、この町を掠め、民を剣で殺し、又捕虜としてバビロンに移すだろう」（20章1～5節）。

③エホヤキム王がエレミヤの巻き物を焼いた（36章）

バビロン王ネブカデネザルの台頭（前六〇五／四年－五六二年）とともに、エレミヤの活動は頂点に達した。彼はヨシヤの時代以来語ってきた預言のすべての巻き物を書き記すように主より命じられた（36章1節以下）。これらの預言の要点は「バビロンの王は必ず来て、この国を滅ぼす」（36章29節）というものであった。彼の書記バルクによって筆記されたこれらの預言は、神殿の庭でバルクによって民に読み聞かされた。民は預言者の使信に深く感動した。このことが宮殿に伝えられると、王と高官たちは、我々も聞きたいと言

った。

エホヤキム王はエルサレムで多くの人の血を流した小暴君であった（Ⅱ列王24章4節）。王はウリヤという預言者を切り殺したことさえある（26章23節）。エホヤキム王の残忍な気質を知っていた高官たちは、エレミヤとバルクに身を隠すように勧めた。預言が朗読されるのを聞いた王は直ちに、エレミヤの巻き物を一節ずつ切り裂いて火に投じた。王はエレミヤを投獄させるよう命令を発したが、預言者の姿は見つからなかった（36章26節）。その後しばらく経ってから、エレミヤは隠れ家から出て来て、公的活動を再開した。

明らかに強制労働によって宮殿拡張をはかることに関心を集中させていたエホヤキムと預言者エレミヤほど、互いに相容れない一対の人物は他にいないであろう。「ああ。不義によって自分の家を建て、不正によって自分の高殿を建てる者。隣人をただで働かせて報酬も払わず」（22章13節）[28]。

④エホヤキムの死と第一回バビロン捕囚（前五九七年）

エホヤキムは、ユダの安全がエジプトの運命と結ばれていると確信していた。それ故、彼は、機会が来ればバビロニヤのくびきを振り捨てる覚悟をしていた。指導的な市民の多くも彼の方針を支持していた。こうした破滅的冒険に対して反対の声を上げたのはエレミヤひとりだった。かれは、同様な危機に際してイザヤが行なったように、このような自殺的暴挙に走らないよう警告した。ネブカデネザルは、御心を行なうべく主によって立てられている。それゆえ、他の多くの国と共にユダも彼の権力下に置かれると、述べた（25章15節以下、27章6節）。ネブカデネザルに抵抗しても無駄である。エジプトに頼る者は、かつてアッシリヤに頼った者と同様、恥辱を受ける、と言うのであった（2章36節以下）。

ついにエホヤキムは貢物の支払いを止め、他の国々もこれに追随した。ネブカデネザルは、バビロニヤに友好的な略奪的遊牧民団をけしかけて、ユダの地を荒らさせた（Ⅱ列王24章2節、エレミヤ書35章11節）。そ

して五九七年には、彼は自らエルサレム攻囲戦の先頭に立ってやって来た。バビロニヤの軍勢が首都を攻囲し始める前に、エホヤキム王は死に、息子の新王エホヤキンは弱冠十八歳の若者だったが、状況が絶望的であることを悟って、攻撃の火ぶたが切られる前に投降することを決めた。母親と廷臣全員と共に彼は捕囚の身となり、兵役についていた七千人の男と鍛冶職人一千人、および彼らの家族と膨大な量の戦利品とが後に従った[29]。

Ⅲ　エレミヤと国家―ゼデキヤ王の時代の中で（五九七～五八六年）―国家に直言するエレミヤ

十一年間にわたるゼデキヤの治世（五九七～五八六年）は、ユダの権力が衰微の一途を辿っていったことと来るべき災厄を避けるためにエレミヤが死力を尽くして努力したことで知られている。ゼデキヤはもともと善意を持った支配者で、国事についても時折エレミヤに諮問することがあったし（37章3～10節、16章21節、38章14～28節）、エレミヤの警告に対してもある程度聴く耳をもっていた。しかしながらゼデキヤは、頑なな高官たちに囲まれて孤立し、結局彼らの言いなりになってしまった（38章5節）。

(1)　第一回バビロン捕囚の民に宛てた第一の手紙（29章1～23節）

前五九七年に第一回バビロン捕囚につれて行かれたユダの捕囚民は、最初のうちは奴隷または奴隷に順ずる社会生活を余儀なくされた。エレミヤ書29章のエレミヤの手紙はこうした征服者の民族が被征服者のユダヤ人を見る目、差別、暴力的待遇などを受けて、最初に捕囚の身となって、非常な恐慌状態に陥ったユダヤ人集団に宛てた手紙である。

抑留生活を送るユダヤ人共同体は三つのグループに分けられる。第一の集団は捕囚という神の審きを素直に受け入れ、バビロン社会に適応しようとしていた。第二の集団は、極端な絶望状態に陥り、偶像礼拝に没

頭したり、自殺を企てたりしていた。第三の集団は、絶望的な勇気を奮い起こしてバビロンに立ち向かい、熱狂と暴力をもってバビロンの軍事力に対抗しようとするファナティシズムに走った。

第一の手紙はエレミヤがバビロンの捕囚民の共同体全体に呼びかけ、捕囚の民が守るべき生活と行動に関する神の勧めから成っている。それは29章4節から23節までの手紙である。エレミヤはバビロンに捕らわれた同胞がエルサレム帰還を焦り企てているのに対し、敵国に落ち着いてとどまるべきことを勧告している。彼は言う。「私があなた方を引いて行ったその町の繁栄（シャーローム）を求め、そのために主に祈れ。そこの繁栄は、あなたがたの繁栄になるのだから」（29章7節）。ここにイスラエルという民族が国家とか国土とかを超えて存在できる民族であることが暗示されている。それは彼らが元来、教会的民族であることをもって使命とし、又、そのような性格を持つからである。それ故、たとえ彼らが捕らわれ敵国に留まっても、なおこのような民族として使命を果たすことが出来るということがエレミヤの確信であった。この点において国家主義的立場に立つ偽預言者達と彼とは対照的な立場に立っていた。エレミヤの新しい契約の思想も又この方向において考えられるべきであろう（31章33～34節）[30]。

エレミヤは第一回バビロン捕囚民にバビロンに定住し、通常の生活をし、生産活動に従事するようにという勧告をした。一定の定められた期間が過ぎれば、つまり、「バビロンに七十年の満ちるころ」再びユダに帰還出来るという神の計画を知らせた（29章10～14節）。

エレミヤ書29章21～23節では、一転して暴力的な反バビロン運動を展開する行為を慎むことを告げるために、暴力集団とそれを支援する預言者集団に激しい非難の言葉を放った。それが偽預言者たちに対する批判の預言である。偽預言者の代表としてコラやの子アハブとマアセヤの子ゼデキヤの二人に対する批判である[31]。

(2) 第一回バビロン捕囚民に宛てた第二の手紙（29章24～30節）

第一回バビロン捕囚民に宛てた第二の手紙は、熱狂的愛国心に駆られて反バビロン抵抗運動を行おうとした一団に火を付けて偽りの預言を行なった偽預言者集団に対する非難の文章である。29章24～30節までは、バビロンに捕囚の民と共に連行された偽預言者シェマヤがエルサレムの祭司マアセヤの子ゼパニヤとすべての祭司に送った手紙に対して、エレミヤが批判を加えた手紙である。エレミヤは31節「シェマヤがあなたがたを偽りに拠り頼ませた」と主の言葉を語ったシェマヤは28章のハナヌヤと同じ平和ないし幸福の預言者であり、民族独立の達成が近いことを預言した熱狂的預言者の一派であったらしい。エレミヤは幻を見る預言者であるが、常に熱狂の預言者ではなく、極めて理性的で人間的な預言者であった。エレミヤは、国家偶像崇拝を本質とする愛国心を否定した。そうして神の正義と公正を実現する組織としての国家を樹立しようとし、そうした国家を熱烈に愛した。もしそれが不可能なら、国家は無くても正義と公正を実現するユダ民族の生活を営むことを願ったのである。これがエレミヤの愛国心であった[32]。

(3) エレミヤと偽預言者－二種類の愛国心

①国家偶像

旧約時代、イスラエル宗教界の大きな争いの一つとしてファナティシズムの運動が起こって来て、アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセの神、そして真の預言者たちの神に対して論争を挑み、敵対していた。ファナティシズムはファナティクスに由来する。このファナティクスとは、第一に神殿（ファヌム）に属しているということを意味する。第二には、神に霊感を与えられて熱情に満ち溢れていることを意味する。エレミヤが生きていた時代のユダ王国には、アッシリヤの支配を受け、さらにバビロンの支配下に置かれて王国としても滅亡の危機に瀕していた。そこでユダ王国にも、多くの熱狂の偽預言者が存在していた。エレミヤは

こうした熱狂的な偽預言者としばしば対決しなければなかった。

イスラエルのファナティシズムは旧約時代のイスラエルの歴史を変えてしまい、民族の宗教信仰を試す文字通りの躓きの石（ローマ9章32節、Ⅰペテロ2章8節）となった。特にイスラエル民族が国家の存亡を問われていたエレミヤの時代において、ユダ国家への妄信的心情として現われ、バビロン王ネブカデネザルの大軍がユダを蹂躙しようとしていた危機的国際状況の中で、異民族の大軍を前にしても、益々自国に対する熱狂的愛国心が熱湯のように噴出したのである。エレミヤ時代の国家に対する熱狂は、神とは区別された別の神である国家をユダ国民が自分の手で偶像として作り上げたということが出来る。神の民が真の神を捨てて国家偶像への崇拝に走ったのである。従って国家に対する熱狂は、一種の愛国心であると共に、国家偶像崇拝であると言うことが出来る。

非利己的衝動は、他人に対する愛や、思いやりであって、利己的衝動を抑えて、人に奉仕し、道徳的である。しかし国家という大集団の中の一貫として行動する個人は、どうであろうか。非利己的衝動は、利己的衝動を抑制ないし犠牲にして、国家に愛情を注ぐ。これが愛国心である。個人は自己を犠牲にして自分の属する国家に奉仕しようとする点で道徳的に見られる。理性もこうした行動を道徳的だと正当化する。

他方、利己的衝動は、一見犠牲にされる装いをまとうが、自己を国家集団と一体化させるようになり、自己犠牲の形をとりながら国家を拡大させていくことで、実は自己のエゴイズムを拡大させている構造を無意識のうちに取ってしまうのである。こうして結局は非利己的衝動の最たる愛国心も、実は無意識のうちに自己のエゴイズムを拡大させ充足させることになる。

従って愛国心は無意識の自己拡大であり、結局のところ集団エゴイズムにすぎない。そこで愛国的熱情は一皮剥けば偽善であり、偽善であるゆえに、個人のエゴイズムよりもはるかに悪を含み得るのである。要す

るに、神の正義と公正によって制御されないままの生の愛国心は、集団エゴイズムの一種にすぎないのである。こうしたラインホルト・ニーバーの『道徳的人間と不道徳社会』（一九三四年）の中での分析は極めて鋭い。

さらに愛国心が熱狂の極限にまで到ると、他からのすべての批判を封じてしまい、国家に対するすべての反対者に非国民、謀反人、反逆者、スパイというレッテルを貼り付け、熱狂者だけが絶対に正しいとする偽善的態度に陥る。ここに国家へのファナティシズムの真の危険性が潜んでいるのである。[33]

②エレミヤと反バビロン運動の愛国的偽預言者達（27章～29章）

エレミヤ書27章、28章、29章は、ゼデキヤ王がバビロン王から五九七年にかいらいの王として王位に就かされていたユダ王国の状況下にあったと見て良い。異民族の支配の状況の中で、支配されたユダ民族の中には圧制者・支配者のバビロンに徹底抗戦を誓い、民族解放運動とユダ国家の完全独立を果たそうと企む人々が現れた。これらの反バビロン運動の指導者層の中には預言者群がいたのである。この人達が偽預言者達である。

27章では、エレミヤはこうした預言者全体にたいして批判し警告を発して、彼らの運動の結末として彼ら自身の滅亡が与えられることを預言した。27章2節で次のように預言している。「あなたは縄とかせとを作り、それをあなたの首につけよ」。バビロン王の命令に従い、バビロンに捕虜として連行されることが神の命令であるという預言である。エレミヤは27章8節で主の言葉を次のように言う。「バビロンの王ネブカデネザルに仕えず、またバビロンの王のくびきに首を出さない民や王国があれば、わたしはその民を剣と飢饉と疫病で罰し、―主の御告げ―彼らを彼の手で皆殺しにする」。

エレミヤの預言は、ユダ国民、ユダ国、さらには周辺諸国や王達がバビロン王の命令に従い、その支配下

に服従するようにというものであった。これは国家や郷土に少なからぬ愛国心を抱いていたユダ民族にとって案に相違した預言である。エレミヤが指摘したことはイスラエル民族が神に背き、偶像を崇拝した結果として、バビロン捕囚になるということである。従ってエレミヤは、民が神の審きを素直に受け入れてバビロンの従属国として生きる道こそ、神の正しい審きであると同時に、ユダ民族の残された唯一の正しい道であると主張した。

ユダの人々は、屈辱的な預言をするエレミヤを殺したくなる程憎らしく思った。彼らは、エレミヤの暗殺を試みたり、王に訴えて彼を投獄させたりした。それだけでなく、エレミヤの預言に対抗する別の預言を民に告げようとした。民族独立運動の背景には、バビロンがユダに対して過大な貢物を要求し、産物を収奪し、神殿の祭儀用具、宝物を略奪したことも、ユダ民族の感情を逆なでし怨念を湧き上がらせたこともある。

さらにそうした共通の事情の下にいた周辺の小国家群は、相寄り相計ってバビロンから独立を勝ち取ろうとする共同謀議を度重ねていた。27章3～11節には、小国家群に神の言葉を告げた。「主はバビロンに小国家群を与える。バビロンに逆らえば、剣、飢饉、疫病で罰する。バビロンに仕えよ」。バビロンの大君主権の受容は、完全な国外追放と国家の消滅を含んでいなかった[34]。

③ユダ国末期の三つの党派（宮廷派、民族独立派、エレミヤと同調者）

こうした国際的に不安定な状況の中で、ユダ王国の中で幾つかの党派が形成され、それぞれ別々の思惑で政治運動が行なわれていた。それらの党派は大体三つに分けられる。

第一のグループは、ゼデキヤ王とそれに従う宮廷派である。彼らはバビロン王ネブカデネザルによって傀儡政権として立てられたグループである。彼らはバビロンの支配をある程度肯定し、弱い王ゼデキヤを守って従属国に甘んじようとした。

第二のグループは、これと正反対の民族独立派であり、いわばナショナリズム運動を推進しようとしていた人々である。これが27章に描かれたエレミヤに反対する偽預言者集団であった。彼らは愛国的熱情のゆえに、熱狂的な反バビロン抵抗運動を行おうとする集団であった。

第三のグループは、第一のゼデキヤ王派でもなく第二のファナティシズムの集団でもないエレミヤと少数の弟子あるいは同調者であった。彼らはただ神の命令に従って神の道を歩もうとしたのである。

バビロン派のゼデキヤ王は、反バビロン運動の陰謀のために周辺諸国から派遣されてきた外交官たちと協議をしていくうちに、正面から反バビロン運動に反対することが出来なくなっていくのである。とは言え、陰謀の中心人物になるわけには行かなかった。バビロンの傀儡王であったからである。

エレミヤが27章で強く非難したのは、ゼデキヤ王よりはむしろバビロン反抗運動の指導者の第二の独立派であった。27章9節でこれらの人々を「預言者、占い師、夢見る者、卜者、呪術者」と呼んでいる。「占い師」のヘブル語はコースメーヒェムであり、くじで占いをする者であって、異教的な預言者であったと考えられる。「夢見る者」は予言的な夢見る者であり、「卜者」はオーンネイヒェムであり、道具でさらさらという音を鳴らしながら占いをする者であった。

独立派は、民族独立の熱情に呼び覚まされ、愛国的情熱に突き動かされるように反バビロン運動に走った。そうした民衆の動向を見て、預言者たちは、偽りの預言を言い触らし、「バビロンの王に仕えるべきでない」と言って反抗運動を指導した。そのうちにバビロンは滅び去り、神殿の祭具一式も捕囚の民もまもなくバビロンから戻って来ると宣伝した。

エレミヤはこの熱狂的愛国者集団に対して「彼らは偽りの預言をしている。主は仰せられる、わたしは彼らを遣わしていない」（27章14～15節）。エレミヤは偽預言者集団を非難し、ゼデキヤ王とエルサレムの住民

に、バビロン王に服従するように勧める（27章11、12～13節）。

エレミヤはユダ王国がバビロン王国の植民地となることを神が求めた道だと言い、この方針をゼデキヤ王並びにエルサレムの住民も採用するように勧めた。その理由は、ユダ王国全体が神によって与えられた正義と公正の道を捨て、不正と弱者への虐げを遂行している国家を却って聖なるものと見なし、あまつさえバアルを礼拝する異教を受け入れ、富、繁栄、平和を神とみなして絶対的価値を賦与し、様々な偶像を作り上げることに終始していたからである。

国家を絶対として国家を熱狂的に信じるファナティシズムの持つ危険性は、ここにあった。これがエレミヤによって指摘されたユダ王国の罪であり、その国家偶像崇拝の罪に対する罰としてバビロン捕囚とバビロンによる植民地化が生じたことを、エレミヤは指摘したのである。

神の経綸は、相対的な国家や民族の興亡を越えたところにある。この超越的な神の見地から見れば、イスラエル民族の国家は、もはや神に対する違反を繰り返す道具に化している。従って神の御手がイスラエルを罰することこそ、神の正義の実現であり、そうした正義の実現の中にまた神の愛が再びイスラエルに注がれるという確信を、エレミヤは抱いていたのである。こうして神がイスラエルの歴史に介入するというエレミヤの確信は、偽預言者たちの熱狂的愛国主義の立場と正反対であったことも当然であろう[35]。

④エレミヤとハナヌヤ（28章、前五九五年）

国家主義的な偽預言者たちのメッセージに真っ向から背くエレミヤは、ギブオン出身の預言者アズルの子ハナヌヤと神殿において対決するに至った。ハナヌヤは二年のうちにユダは独立し、エホヤキンは王位に復帰するであろうと預言した（28章1～4節）。エレミヤは最初ためらったが（これは政治的な状況から理解できる）、再び、今度は鉄のかせを携えて、彼らの前に現れた。そして偽りの預言者に関する申命記の律法と一

致して、ハナヌヤの死を預言した。そして、それは、その年のうちに起こった、と報告されている（28章10～17節）[36]。

(4) ユダ王国の最後の反逆とエルサレム陥落（32章～34章、37章～39章、前五八六年）

①ユダ王国のバビロンへの反逆とエレミヤのゼデキヤ王へのバビロン投降勧告

バビロンに対して反旗を翻す企てを支持する声は多かった（28章1節以下）。主が世界の支配権を委ねられたネブカデネザルに服従せよと訴えるエレミヤの努力は無駄に終わった（37章11節以下）。

エレミヤの警告を無視して、ゼデキヤは、遂に指導的高官と国民の声に屈して、ネブカデネザルに対する忠誠を否認するという暴挙に走り、バビロニヤ軍に対する軍事的保護を求めてエジプトに大使を派遣した。先に、ネブカデネザルはゼデキヤと条約（ベリート）を結んだが、ゼデキヤは自ら誓約を破った（エゼキエル書17章13～21節、Ⅱ歴代36章13節）。バビロニヤ軍がエルサレム防衛隊と交戦している間に、エレミヤは王と対決し、エルサレム陥落は神の御意志であると宣言し、バビロニヤへの投降を勧めた（34章1～5節、21章3～7節）。

②エレミヤの新契約と回復の預言－エレミヤの最終的な希望の告白（31章31～34節）

エレミヤは決して絶望だけを語る預言者ではなかった。最後には、破られた紙との契約が、罪の赦しにより、神の手でもう一度新しく結ばれることを告げる。それが「新しい契約」と呼ばれる希望の預言である（31章31～34節）。

新しい契約は内面的であると共に個人的である。イスラエルの民の一人ひとりが主に連なることによってイスラエル全体を代表すべき立場に置かれる。国土の喪失も国家の破滅も彼らの民族としての根本的立場を奪うことは不可能である。イスラエル民族は一度国家を破滅されることによって、却って教会的民族として

の使命をより良く果たし、その性格を鮮明に示すことが出来る。エレミヤの時代の歴史的現実は国家的民族より教会的民族への転換をイスラエル人に迫った。このような歴史の中に示された主の意志を代弁した者こそエレミヤであった。彼がバビロンに抵抗することの無用であることを人々に説得した理由もそこにある。[37]

「彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」（31章33節）。もはや戒めは石板にではなく、心に刻まれ、外からの強制ではなく、内発的に人々が神の戒めを守るようになると告げられる。「人々はもはや、『主を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ」（31章34節）。新しい形態の契約関係は、民族全体としての共同体的関係から完全に個人的な関係へと変わったことを理解する。[38]

エレミヤは新契約の預言と共にユダの回復の預言もした。エルサレムが攻囲され、占領必須という時に、エレミヤは獄舎に拘留されたが、次のように回復を預言した。「主はこう仰せられる。『廃墟となった』と言っているこの所、荒れすたれたユダの町々とエルサレムのちまたで、楽しみの声、と喜びの声、花婿の声と花嫁の声、…主の宮に感謝のいけにえを携えて来る人たちの声が再び聞こえる。それは、わたしがこの国の繁栄を元どおりにし、初めのようにするからだ」（33章10～11節）。[39]

③エレミヤ、アナトテのハナムエルの土地を購入する（32章）

ネブカデネザルは五八八年にバビロン軍を使わしてエルサレムを封鎖した。エジプト軍が接近して、包囲が一時的に解かれた時（37章5節）、エレミヤは都を去ってアナトテを訪れた。それは多分、畑を買う交渉を始めるためであった。彼は投降の罪で逮捕され、打たれて獄に入れられた。そこにゼデキヤ王が訪ねた時、

エレミヤは以前と同じメッセージを伝えた（37章11～21節）。彼はもっと良い獄舎に移され、叔父シャルムの子ハナムエルの訪問を受けた。そしてエレミヤは、彼から畑を買う契約を結んだ（32章）。この行為は自分の民の未来と彼らの荒廃した地の未来を信じることの確認であった。エレミヤは又、市民に町を出て投降するよう勧告した（21章8～10節）。防備を固めるために家屋を解体したり（33章4節）、ユダの国のラキシュとアゼカ以外のすべてがバビロン軍に支配され、包囲者たちが、城壁を破る用意をしたりして、状況が悪くなるにつれて、エレミヤの立場も益々苦しくなっていった。親エジプト派は、反逆罪のためにエレミヤに死刑を要求し、彼を穴に投げ込んだ。王の許しを得て、彼を餓死から救ったのはエチオピアの宦官エベデ・メレクであった（38章）。こうして王との最後の会見を許された。そして彼は王に、ただ町を引き渡すように説いた（38章）。

町が破壊された後エレミヤは、ネブカデネザルの特別な命令によって保護され、ユダに残るか捕囚の人々と共にバビロンに行くかの選択を与えられた。前者を選んだ後エレミヤは、シャファンの家族の一員であった新しい支配者のゲダルヤに委ねられた（39章）。ゲダルヤが暗殺された後エレミヤは、反乱者やその支持者たちによって無理矢理エジプトに連れていかれた（40～43章）。彼について伝えられている最後のことは、彼がこの新しいエジプトのディアスポラになした説教が顧みられなかったということである（44章）。我々は、エレミヤがエルサレム陥落後間もなくナイル・デルタのユダヤ人の居住地の一つで死んだと推測しなければならない[40]。

結語

エレミヤは生涯、国家の政策という公の世界に引き入れられた人物であり、また自分の生活を通して最も

重要な決定に影響を及ぼそうとした人物であった。しかし、政治的な現実認識と妥協力との微妙な差異を探ろうとする時、唯一の絶対的な非妥協的な確信を見出す。「わたしのことばは火のようではないか。また、岩を砕く金鎚のようではないか」（23章29節）。彼自身が疎外されているということの意味を深く考えた時に、人間が罪と奴隷の状態にあるということをはっきりと確信するに至ったのである。そこで彼は、人間の心が悪を捨てることが出来ず、絶望的な病にあるということを語る（13章23節、17章9節）。自らを神に選ばれたと信じている国は、実際には認められないし、神の審きの下にあるのである。その民は、自分の意のままに作りまた壊す陶器師の手中にある粘土である（18章1～11節）[41]。

国家的危機にあってエレミヤは神との契約を破った国家指導者とユダの民の罪を指摘し、また、地と血に存在の根拠を求める民族主義的国家主義のあり方を批判した。ユダ国の指導者と民は非合理な神殿偶像崇拝と国家偶像崇拝をし、熱狂的民族主義に走った。国家の現状に同調しないエレミヤは同国人の目には裏切り者に見え、彼は、非愛国者、卑怯な平和主義者のそしりを受けた。しかしエレミヤは決して自国の地上的な勢力の浮沈で一喜一憂する低級な擬似愛国者でなかったのと同様に、自国の運命に冷淡で利己的な非国民であったのではない。彼の国家に寄せる理想はむしろ高いところにあった。彼はバビロンをユダの罪に対する神の鞭と見た。それは神の厳粛な審きである。国家はその審判に服従し神に帰属しなければならない。ここに国家の希望があり権威がある。国家の基礎を神の真理に立たせること、ここにエレミヤの預言が一般民衆の平均的希望とかけ離れ、彼が迫害と嘲笑の中に悲哀の生涯を送らねばならない理由があった[42]。

今日の我々から見るなら、ネブカデネザルに対するゼデキヤの反乱は、当時の政治的状況に対する荒っぽい誤算の結果と映る。アッシリヤを粉砕した勢力に歯向かうなど、エジプトの援助に頼るのに劣らず無謀と言わねばならない。新しい帝国はユダの存在を脅かさず、大君主権の承認と貢物の納付だけで満足していた

らしい。ユダは、アッシリヤやエジプトの保護下にあるよりは、バビロニヤの大君主権のもとでの方が容易に生きのびることが出来たであろう。しかしユダヤ民族主義、国家主義がその道をとらせなかったのである。

ユダ王国の支配者たちがとった立場はエレミヤが反対したわけは政治的知恵ではない。エレミヤの勧告は、ユダはアッシリヤに降伏してはならないと主張したイザヤのとった立場の逆転を意味していた。預言者は政治理論の視点から世界を見ない。神の目を通して世界を見る。エレミヤにとって、ネブカデネザルとの関わりは、神との関わりより遥かに重要性の少ないものだった。

エレミヤは神の状況に絶えずさらされていた。民の気分に怠りなく目を注ぎ、必要に応じて彼らに呼びかけ、挑戦、警告を大胆に行ない、神とイスラエルとの関係におけるもつれを解こうと試みた。彼は「神の怒りの鞭を受ける苦しみ」を他のどの預言者よりも鋭く経験したが、同時にその怒りに勝る神のイスラエルへの愛着の確かさにいのちの芯まで浸透されていた。エレミヤは預言者としての召命を受けた時、神の契約を破ったユダ国家を審き、「壊す」ことと、審きの後に「建て直す」こと、回復させることの預言の言葉を語る使命を与えられたが、その預言者としての全生涯においてその使命を果たした。「かつてわたしが、引き抜き、引き渡し、壊し、滅ぼし、災いを与えようと、彼らを見張っていたように、今度は、彼らを建て直し、また植えるために見守ろう。―主の御告げ―」（31章28節、1章10節参照）。「見よ。その日が来る。―主の御告げ―その日、わたしはダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えてこの国に公義と正義を行う。その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は『主は私たちの正義』と呼ばれよう」（23章5～6節）[43]。

注

①浅野順一『イスラエル預言者の神学』創文社　昭和三〇年　二七七～三八一頁。
②A・ヘッシェル著、森泉弘次訳『イスラエル預言者』（上）　教文館　一九九二年　二〇二頁。
③矢内原忠雄『余の尊敬する人物』（岩波新書65）　岩波書店　昭和一五年　5～6頁。
④浅野順一『預言者の研究』新教出版社　一九六八年　一五七～一五八頁。
⑤矢内原忠雄　前掲書　7頁。
⑥J. A. Thompson The Book of Jeremiah（The New International Commentary on the Old Testament）Grand Rapids, Michigan : William B. Eerdmans Publishing Company 1980 p. 154.
⑦浅野順一　前掲書『預言者の研究』一六七～一六八頁。
⑧A・ヘッシェル　前掲書　二四一～二四二頁。
⑨A・ヘッシェル　前掲書　二五六～二五八頁。
⑩小泉仰『預言者エレミヤと現代』教文館　二〇〇二年　五二～六一頁。
⑪小泉仰　前掲書　六三～六四頁。
⑫小泉仰　前掲書　六五～六六頁。
⑬R・K・ハリソン著　富井悠夫訳『エレミヤ書、哀歌』（ティンダル聖書注解）いのちのことば社　二〇〇五年　九四頁、一二〇頁。
⑭雨宮慧『旧約聖書の預言者たち』日本放送出版協会　一九九七年　一五七頁。
⑮雨宮慧　前掲書　一三六～一四九頁。
⑯江原萬里『宗教と国家―エレミヤ記の研究―』岩波書店　昭和一七年　一一六～一一七頁。

⑰江原萬里　前掲書　一二三頁。
⑱中沢啓介「エレミヤ書」宇田進等編『実用聖書注解』いのちのことば社　一九九五年　七九五頁。
⑲矢内原忠雄　前掲書　一二～一三頁。
⑳エー・シー・ニウドソン著　宮澤六郎訳『ヘブル預言者の宗教』教文館出版部　昭和二年　一七七～一七八頁。
㉑米倉充『旧約聖書の世界―その歴史と思想』人文書院　一九八九年　一七三頁。
㉒江原萬里　前掲書　一五七頁。
㉓小泉仰　前掲書　七四～七五頁。
㉔浅野順一『旧約聖書』岩波書店　昭和一一年　二〇六頁。
㉕矢内原忠雄　前掲書　一八～一九頁。
㉖浅野順一　前掲書『預言者の研究』一七五頁
㉗矢内原忠雄　前掲書　一九～二一頁。
㉘A・ヘッシェル　前掲書　二五九～二六〇頁。
㉙A・ヘッシェル　前掲書　二六二～二六三頁。
㉚浅野順一　前掲書『イスラエル預言者の神学』三〇三頁。
㉛小泉仰　前掲書　一〇八～一一〇頁。
㉜小泉仰　前掲書　一一二～一一五頁。
㉝小泉仰　前掲書　九四～九六頁。
㉞A・ヘッシェル　前掲書　二六五頁。

㉟小泉仰　前掲書　一〇〇～一〇四頁。
㊱J・ブレンキンソップ著　樋口進訳『旧約聖書の歴史―カナン定着からヘレニズム時代まで』教文館　一九九七年　八〇頁。
㊲浅野順一　前掲書『イスラエル預言者の神学』三〇三頁。
㊳R・K・ハリソン　前掲書　一五一頁。
㊴A・ヘッシェル　前掲書　二六六～二六七頁。
㊵ブレンキンソップ　前掲書　一八一～一八二頁。
㊶ブレンキンソップ　前掲書　一八四頁。
㊷米倉充　前掲書　一七二頁。
㊸A・ヘッシェル　前掲書　二六八～二六九頁。